

ラオスの銀行セクター

1986年よりラオスは、それまでの中央統制経済から市場経済に転換し、ラオス中央銀行（State Bank of Lao : BOL）も、1988年より単一銀行制度から二層銀行制度に転換した。それにより、96のBOLの支店は7行の国有商業銀行に転換された。1998年には財政再建計画により、7行の銀行はさらにラオス開発銀行（LDB）、ラオス外商銀行（BCEL）、農業振興銀行（APB）に統合された。2007年にはAPBが、預金を受け入れない政策的銀行のNayoby BankとAPBに分割され、現在、国有商業銀行は4行となった。

2009年末現在、銀行セクターは、国有商業銀行3行、政策銀行1行、民間銀行7行、合併銀行1行、外国銀行支店7支店（タイ5、マレーシア1、ベトナム1、）駐在員事務所1となっている。

ラオスでは国有銀行が銀行セクターを主導している。2009年末時点の数字で、国有銀行は、資産額で67%、預金量で73%、融資額で63%のシェアを握っている。外国銀行も設立されているが、首都ビエンチャン以外での営業が許されていないので、業務拡大は限定的である。

銀行セクターは、まだ、預金と融資と言った伝統的銀行サービスの提供が主体となり、発展の余地は大きい。債券市場、株式市場がまだ発達していないため、銀行融資が唯一の資金調達手段である。

ラオスは、経済規模に対する銀行セクターの規模が非常に小さい状況である。例えば、2009年で見ると、資産の対GDP比が39%であり、ベトナムの138%、マレーシアの201%と比較するとその規模の小ささが分かる。融資や預金の対GDP比もアジア諸国に比較すると非常に小さい。

国土の80%が山岳、台地であるためにインフラは未整備で、銀行の営業は都市部と限定された地方である。地方に営業拠点を拡大することは銀行にとって費用負担がかさみ、効率的ではない。

ラオスの銀行セクターは以下の要因で、力強い成長を期待できる。

- ・銀行セクターは非常に低い出発点にある。
- ・世界銀行によれば2011～2015年の成長は7.7%と高い成長見込みである。
- ・政府が民間部門の発展を奨励しコミットしている。
- ・2011年の証券市場の開始。

（出所）Sacombank-SBS アナリストレポートおよび中央銀行統計